

第1課 文字・発音

スペイン語は、正確な発音を習得し上手に発音するに越したことはありませんが、最初からこだわりすぎると前に進めませんので、音声に関する詳細には触れず、ここでは口の動かし方や舌先の使い方についての説明を最小限にとどめ、まずはカタカナ表記を通して慣れ親しむことを目的とします。幸いスペイン語の発音は日本語のそれと似通っていることから、かりに日本語的な発音で相手に話しかけても相手は想像力を働かせて聞きとってくれます。

とはいえ、もともと日本語の発音には l と r の違いがなかったり、喉の奥から吐き出すような音 (j) や上の歯で下唇を若干噛むようにして出す音 (f) がなかったり、また基本的に日本語は子音と母音の組み合わせの連続で音を出したりと、細かい部分ではいろいろ違いが見られるのは確かです。したがって、カタカナ表記はまんざら捨てたものではありませんが、あくまでも便宜上の措置だと思ってください。

何はともあれ、この第1課はスペイン語の入り口です。この課で発音の仕組みをしっかり学べば、英語のようにいちいち辞書で発音を確認する必要はなくなります。大胆な言い方をすると、たとえ意味がわからなくても、スペイン語はすべて読めるようになるのです。

1 ■ アルファベット (27 文字)

(青色の5文字は「母音」を示します。)

A a [ア]	H h [アチェ]
B b [ベ]	I i [イ]
C c [セ]	J j [ホタ]
D d [デ]	K k [カ]
E e [エ]	L l [エレ]
F f [エフエ]	M m [エメ]
G g [ゲ]	N n [エネ]

🔊 001

Ñ ñ [エニエ]
O o [オ]
P p [ペ]
Q q [ク]
R r [エレ]
S s [エセ]
T t [テ]

U u [ウ]
V v [ウベ]
W w [ウベ ドブレ]
X x [エクス]
Y y [イ グリエガ]
Z z [セタ]

2 ■ 発音

スペイン語の発音は、細かいことを気にしなければ、読み方は決まっていますので、英語に比べると発音で苦勞することはありません。基本的には、規則に従ってローマ字風に発音すればよいと思います。

まずはアクセントを気にせず、子音と母音の組み合わせで音を出してみましょう。

🔊 002

(1) 母音

a [ア] **e** [エ] **i** [イ] **o** [オ] **u** [ウ]

(2) 子音

b (vと同じ音)

バ	ベ	ビ	ボ	ブ
ba	be	bi	bo	bu
バル	ベカ	ルビオ		
bar (バル)	beca (奨学金)	rubio (金髪の)		
ボダ	ブダ			
boda (結婚式)	Buda (仏陀)			

c (①「c + a, o, u」で日本語の「カ行」の音、②「c + e, i」で「サ行」の音)

カ	コ	ク
ca	co	cu
カサ	コド	クバ
casa (家)	codo (肘)	Cuba (キューバ)

スペイン古典演劇にみる一節

¿Qué **es** la vida? Un frenesí.

¿Qué **es** la vida? Una ilusión,
una sombra, una ficción,
y el mayor bien* **es** pequeño,
que toda la vida **es** sueño,
y los sueños sueños **son**.

(太字=疑問詞/青の太字=「動詞 ser」)

* bien は男性名詞で、「幸福、利益」という意味。

人生とは何だ？ 狂乱だ。

人生とはなんだ？ まやかし、

影、幻だ。

この上ない幸せとてちっぽけなものだ。

人生はすべてが夢だ。

夢はしよせん夢なのだ。(拙訳)

(*La vida es sueño* 『人生は夢』)

スペイン語を見てみると、疑問詞 qué (「4 課 5. 疑問文」参照) があるほか、動詞は ser だけなので問題なく理解できると思います。ただし、作品全体を見渡すと、バロック・スタイルの難解な言い回しが至るところにあり、韻文で構成されたセリフの脚韻を活かすために倒置法が用いられていますので、日本語に訳すのは一朝一夕というわけにはいきません。

これは 17 世紀のスペイン・バロック演劇を代表する劇作家ペドロ・カルデロン・デ・ラ・バルカ (1600-81) が書いた『人生は夢』の中で、主人公セヒスムンドが心中を吐露する一場面の台詞です。

王家の世継ぎとして生まれたセヒスムンドは、父王が凝った占星術 (将来息子によって自分の地位が危うくなるという内容) のせいで、誕生後に暗い塔内に幽閉され、一人の養育係によって育てられます。やがて成人に達すると、王は息子が王子としての適性を持ち合わせているかどうか試そうと考え、王子に

3. ¿Hoy es miércoles? (今日は水曜日ですか?)

Sí, ().

No, ().

III. () 内に también または tampoco を入れましょう。

1. Nosotros estudiamos en la biblioteca, ¿y tú? — Yo ().

私たちは図書館で勉強するけど、きみはどうする? — 私もそうする。

2. Juan no está contento, ¿y usted? — Yo ().

フアンは満足していないけど、あなたは? — 私も同じです。

3. Yo vivo en esta ciudad, ¿y vosotros? — Nosotros ().

私はこの町に住んでいるが、きみたちはどこに住んでいるの? — 私たちもここに住んでいる。

4. No hablamos alemán, ¿y ustedes? — Nosotros ().

私たちはドイツ語を話せませんが、あなた方は? — 同じく話せません。

IV. スペイン語を日本語に訳してみましょう

1. Ana y Pilar son muy amigas. Las dos son estudiosas y cada fin de semana visitan juntas los museos de la ciudad; a veces los de otras ciudades.

2. ¿Cuándo viajan Uds. por Canadá? — Viajamos dentro de un mes. Por eso aprendemos francés además de inglés.

3. Yo trabajo como programador. Mi oficina está en el centro de la ciudad. Llevo casi diez años en esta compañía. Mis compañeros de trabajo son muy simpáticos y amables.

眠り薬を飲ませ、豪華な衣装を着せて宮廷へ連れ出します。眠り薬は、事がうまくいかなかった場合に備えてのもので、つまり王子が塔へ戻されたときに予想される心の衝撃を和らげるためです。さて、宮廷に連れ出された王子はこれまでの経緯を聞かされると、急激な環境の変化も相まって、父の処遇に激怒し宮廷人らしからぬ暴戾ぼうれいを働きます。そこで王は、ふたたび眠り薬を飲ませ牢獄へ送り返します。やがて、眠りから覚めた王子の人生観に変化の兆しが見え、上記のようなセリフを口にするのです。

一方、この芝居には副筋として当時の人たちの大きな関心事の一つ「名誉感情」にまつわる事件も含まれていて、ダブルプロットの構造を持つ物語としておもしろく描かれています。この作品でカルデロンが言いたいのは、超自然現象を利用して「魂の救済」を得ることではなく、生きているうちに理性を働かせ、「善行を積む」ことの大切さです。

カルデロンは、幼少の頃にイエズス会の帝室学院で教育を受け、のちにアルカラ・デ・エナーレス大学とサラマンカ大学で修辞学や教会法などを学びました。20代から芝居を舞台にかけ、上記の作品のほかにも『名誉の医師』、『驚異の魔術師』、『淑女「ドゥエンデ」』などの名作を残しました。1634年にはフェリペ4世から宮廷劇作家に任命され、新しく建設されたブエン・レティーロ宮にて『こよなき魔力、愛』などの神話劇を上演しています。晩年は主に聖体劇や王家の祝祭のときに演じられる神話劇を中心に手がけるようになりました。

カルデロンのスタイルには、当時流行した文飾主義クルテラニスム（誇飾主義）や奇知主義コンセプティスムの影響が見られ、人間の理性と情念の対峙、自然の美しさと荒々しさ、登場人物たちの喜怒哀楽の模様など、明暗のコントラストが見事に描かれています。

〈参考文献〉

- 『カルデロン演劇集』、佐竹謙一訳、名古屋大学出版会、2008年。
佐竹謙一『スペイン文学案内』、岩波書店（岩波文庫）、2013年。
佐竹謙一『カルデロンの劇芸術』、国書刊行会、2019年。

第8課 再帰動詞／時刻の表現

「再帰動詞」は、「自分の行為が自分自身に及ぶ」（再び帰る）ということで、「主語と目的語が同じ」になります。すなわち「自分自身を（に）…する」という構文です。似たような形ですが、英語にも「再帰用法」として **oneself** が使われます。

He **takes himself** too seriously.

彼は生真面目すぎる。（＝彼は「自分自身を」あまりにも真面目にとらえてしまう。）

She **taught herself** Spanish.

彼女は独学でスペイン語を身につけた。（＝彼女は「自分自身に」スペイン語を教えた。）

1 ■ 再帰代名詞

スペイン語で、この「自分自身を（に）」にあたる代名詞を「再帰代名詞」と言います。下の「再帰代名詞」の表を、7課で学んだ「直接目的語」、「間接目的語」の表と見くらべてみると、**me, te, nos, os** の部分はまったく同じであることがわかります。

■ 再帰代名詞 ■

人称	単数	複数
I	me	nos
II	te	os
III	se	se

■ 例 (levantarse 起きる) ■

人称	単数	複数
I	me levanto	nos levantamos
II	te levantas	os levantáis
III	se levanta	se levantan

2 ■ 再帰動詞の用法(その1)

再帰動詞には以下のような用法があります。

(1) 「再帰代名詞」が動詞の「直接目的語」となる場合

053

これはよく使われる用法で、「直接再帰」とも呼ばれます。「自分自身を…する」という形です。

Siempre **te levantas** a las siete, ¿verdad?

いつもきみは7時に起きるよね。

（“te levantas” は、直訳すると「(きみは) きみ自身を起こす」となります。）

¿Todos los días **se levantan** (Uds.) a la misma hora?

— No, no siempre **nos levantamos** a la misma hora.

あなた方は毎日同じ時間に起きますか？—いいえ、必ずしも同じ時間とは限りません。

（“todos los días” は「毎日」、「no siempre ...」は「いつも…とは限らない」、「a la misma hora」は「同じ時刻に」という意味。）

Todas las noches **me acuesto temprano** y **me levanto** en la madrugada. 私は毎晩早く寝て、明け方に起きる。

（“todas las noches” は「毎晩」という意味。）

¿Cómo **te llamas**? — **Me llamo** Ricardo.

きみの名前は？—リカルドだ。（＝きみはきみ自身を何と呼ぶの？—私は私自身をリカルドと呼ぶ。）

（英語風に Mi nombre es Ricardo. 「私の名前はリカルドです」としても間違いではありませんが、普通は llamarse を用います。）

Diálogo 4

祖父は映画館で居眠り

101

Joaquín: El otro día fui al cine con mis abuelos.

Mercedes: ¿Qué película visteis?

Joaquín: Vimos una película vieja de Chaplin.

Mercedes: A mí me encantan las^{*1} de los años 20 o 30 del siglo pasado.

Joaquín: Pero, ¡fíjate!^{*2} Cuando comenzó, mi abuelo se quedó dormido y no se despertó.

Mercedes: ¿Hasta el final?

Joaquín: Exacto. Y además murmuraba con los ojos medio abiertos en algunas escenas interesantísimas.

Mercedes: Tal vez se divertiría mezclando su sueño con las imágenes de la pantalla.

Joaquín: Debe de ser así. A propósito, ¿no tienes hambre?

Mercedes: No mucha. Si quieres podemos comer tapas^{*3} con cerveza.

Joaquín: Muy bien. Vamos.

*1 las は、películas [映画] をさします。

*2 “fíjate” は再帰動詞 fijarse (注目する) の命令法 (2 人称単数)。「19 課 2. 肯定命令」参照。

*3 tapa は「酒のつまみ」のこと。

訳

ホアキン：先日、祖父母と映画を見に行ったんだ。

メルセデス：どんなの映画を見たの？

ホアキン：チャップリンの古い映画だよ。

メルセデス：私は 1920 年代とか 30 年代の映画は大好きだけど。

ホアキン：ところがだよ、映画が始まったとき祖父は船を漕ぎ始め、ずっと目を覚さなかったんだ。

メルセデス：おしまいまで？

ホアキン：そうなんだよ。そのうえ、ものすごくおもしろい場面になると、半分目を開けたままぶつぶつ言っていた。

メルセデス：たぶん映画のシーンと夢とがごっちゃになって楽しんでいたんじゃないの。

ホアキン：そうかもね。ところで、お腹空かない？

メルセデス：そんなに空いてないけど。もしよかったら、何かつまんでビールでも飲みましょう。

ホアキン：そりゃいいや。じゃ、行こう。

練習問題 9

I. [] 内の動詞を活用させましょう。

- 1 . No cabe la menor duda de que [ser] más difícil para nosotros dominar el alemán que el español. []
私たちにとって、スペイン語よりもドイツ語を習得するほうがむずかしいことに疑いの余地はない。
- 2 . Siento que no [poder] participar en el partido de fútbol. []
きみがサッカーの試合に参加できなかったことを残念に思う。
- 3 . No está comprobado si el presidente [manifestar] lo que [pensar] verdaderamente. [] []
大統領が本心を語ったかどうか確証はない。
- 4 . Me alegro de que [obtener] la beca de estudios en España. []
きみがスペインへ留学するための奨学金を得たことを私は喜んでいる。
- 5 . Pensamos que [ocurrir] un gran terremoto tarde o temprano. []
私たちには遅かれ早かれ大地震が発生するような気がする。
- 6 . Los esquiadores anhelan que [nevar] mucho en las montañas. []
スキーをする人たちの切なる願いは、山にたくさん雪が降ることだ。
- 7 . Estoy contento de que aquel jugador [ganar] una medalla de oro en los Olímpicos. []
あの選手がオリンピックで金メダルをとったことを私は喜んでいる。
- 8 . El padre de Camila desea que su hija [graduarse] de la escuela con sobresaliente en todas las asignaturas. []
カミーラの父親は、娘がすべての科目において優秀な成績をおさめ卒業することを願っている。

- 9 . No es extraño que [descubrirse] una nueva fuente de energía en este siglo. []
今世紀に新しいエネルギー源が発見されても不思議ではない。
10. Temo que ellos [cerrar] su tienda por el mal estado de la economía. []
経済の悪化によって彼らが店を閉めることを私は危惧する。
11. No es necesario que [cambiar] de teléfono inteligente tan apresuradamente. []
きみはそんなに急いでスマートフォンを変える必要はない。
12. No abandonemos la esperanza de que siempre [haber] un camino en nuestro futuro. []
私たちの未来には道が開けているという希望を捨てないでおう。
(abandonemos は命令形 [1人称複数]。「19 課」参照。)
13. Es una sensación rara que me [saludar] de repente el que nunca lo [hacer]. []
挨拶したことのない人が急に挨拶をしてくるとは、なんとも妙な気分だ。
14. Vale la pena que [aceptar] la oferta de esa clase de trabajo. []
きみたちにとってその種の仕事の申し出を受け入れる価値はある。
15. El doctor me recomienda que [abstenerse] de tomar alcohol. []
医者は私にアルコールを控えるよう勧める。